



産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞東京本社2017
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111 (大代表)

産経新聞

船のかじを取る人は命令を出す役を他人に任せられることもできるが、政治家は自らかじを取る気骨だけでなく、自ら命令を出す言葉を持たねばならぬ、とは、関ヶ原合戦をめぐる徳川家康と毛利輝元の振る舞いは対照的

歴史の文差点

東京大名塾教授 山内昌之



「政治家になるための教訓集」である。輝元は西軍の総大将な『モリア』(9)。将たる者は先頭に立って兵を指揮し、必要なら船のかじを自ら取る必要もある。これは大局的にかなる戦略で何を指すのか、誰が

「主敵」で、それを倒すにはいかに味方を増やすのか。この青写真がなければ、勝利はもとより理想の表現もおぼつかない。関ヶ原合戦をめぐり、徳川家康と毛利輝元の振る舞いは対照的を逐うて天下を望むのか、家康の会津遠征で領地を空けた四国九州の東軍武将の留守中に「火事場泥棒」に甘んじるのか、輝元の戦略は定まっていたのか、関ヶ原合戦で家康本陣の背後にあたる、南宮山に毛利の兵を置

戦略・説明：関ヶ原と角界

いても、東西いづれが勝とうともし。早々汝共ハ罷上給へ(根毛利こそ漁夫の利を得るために参戦しなかつたのではないか。天下取りのため西に向かいながら、家康が関八州で小利を得る姿は空想的にも考えられな

彦左衛門も誇らしげである。

輝元になかったのは、断じて行えば鬼神も之を避くという気迫である。考えを間違いない周囲に伝える明確な指示もなかった。政局の変動に感じた判断と、政治の弾力に対応する柔軟性も欠けていた。もし家康が輝元の立場にあったなら、第1段階で関ヶ原に幼主、豊臣秀頼を担ぎ出せず、戦局を傍観したあまり西軍が敗北した場合でも、第2段階で何ができるかを考えたはずだ。天下の堅城に拠る戦略的優勢と「玉」の秀頼を戴く政治的優位性はまだ消えていない。大坂に逃れた西軍には立花宗茂や島津義弘のように再戦を

望む勇将も残っており、乾坤一擲の勝負を挑む選択も残されていた。関ヶ原にいた毛利秀元が率いる本軍は、大坂にほぼ無傷で帰還した。輝元は、戦中戦後の両局面で天下を窺える好機に2度も恵まれながら、重要な決断に踏み切れなかった。必要なのは、誤解のない態度と説明できる言葉を大切にすることだ。その意味でも、最近の貴乃花親方の言動には戦略性と説明能力が欠けている。私が『文芸春秋』誌で始めた新連載「將軍の世紀」は、角界の問題を戦略の文脈で考える手がかりにもなると思う。

(やまうち まさゆき)